

石原慎太郎著「真の指導者とは」日本経営合理化協会出版局 2004年4月27日刊を読む

指導者の個性とは何かを考えるー強烈な自我とはー

1. いずれにしる、組織の中でぬきんでている人間というのはやはり自我、個性というものを持っていなければだめです。

2. チャーチル

(1) 私はチャーチルという政治家が好きですが、ニクソンの書いた『指導者とは』によると、チャーチルというのは子供のころ、友人と人生について議論していて、少年なりのニヒリズムなのか、「人間はすべて虫けらみたいなものだ」という結論に達したそうなの。

(2) ところが、チャーチルは、「みんながみんな虫だ。しかし僕だけは<sup>ほたる</sup>虫だ」と言った。つまり、チャーチルは死ぬまで自分は特殊な人間であるということを信じて疑わなかった。

(3) その思い込みが外れると悲惨なことにもなるが、私はそれぐらいの自負というのはあってもいいと思う。だから、チャーチルは人の言えないことを平気で言えました。

(4) チャーチルの言葉で私が一番好きなのは、第二次大戦を戦っているときに、ある人に、「いま敵味方ははっきりしておりますけど、しかし、いま戦っている日本やドイツ以外に仮想敵国はどこですか。ロシアはどうですか」と聞かれて、「もちろんそうだ」「ほかにどこですか」とさらに尋ねられると、「イギリス以外の国は全部仮想敵国だ」と答えたということです。

(5) これはじつに平明で強い真理であって、みんなそう思っていながら、なかなか口にできないが、チャーチルはそれを言い切るというところに彼の指導者としての強さがあったと思う。

3. シーザー

(1) プルタークの『英雄伝』を読むと、シーザーがスペインの提督になって赴任したときアレキサンダー大王の伝記を読んでいたら、シーザーが途中で本を投げ出して泣いたそうなの。側近が、

「どうしたのですか」と質したら、

「とにかくおれは残念で口惜しい。アレキサンダーは、いまのおれの年ですすでに世界を制覇していた」と言って、側近が慰めたら「余計なことだ」と怒ったそうなの。

(2)そこまで自分について思い込むのはいささか危うい気がしないでもないが、しかし、シーザーは後に天下をとってローマをつくったから、彼の個性の一つの発露としてこの挿話も残っているのでしょう。

(3)何であろうと、指導者というのは理念も含めて強い信念を持っていなければならない。それが指導者としての吸引力に他ならない。

(4)その信念とはいろいろあろうが、時代を超え、立場を超えた一種の垂直倫理というか、垂直の理念、情念、価値観で支えられているものです。

### 3. シスター・マザー・テレサ

(1)ノーベル賞をもらったシスター・マザー・テレサは、自分がソーシャルワーカーと呼ばれることが非常に不本意として怒ったそうです。

(2)「私は決して社会奉仕をしているのではなくて、そんなものをしているという意識だったら私はとっくにやめているでしょう。自分は神に命じられ、神にこたえるためにこの辛い仕事を続けているのです」(『マザー・テレサ』シャーロット・グレイ著)と。

(3)これはまさしく彼女なりの強い信念だった。こういう人は神がかりといえれば神がかりですが、いろいろな形で天の声を聞くのだと思います。しかし、信仰における行動者とリーダーとはまたちょっと違うものもありますが。

P187 ~ 190

#### [ コメント ]

リーダーになるためには、強烈な自我、個性を持たねばならないのか、強烈な自我、個性を持っているからリーダーになることができるのかということはさておき、多くの人々を引きつけ時代を牽引するには、強い信念に支えられた行動が大切なことがよくわかる。

- 2009年6月25日林明夫記 -